

## 巻 頭 言

# 精神医学への信頼：Spitzer 氏の訃報に接して

神庭重信 日本精神神経学会副理事長  
Shigenobu Kanba

Robert L. Spitzer 氏が昨年末に 83 歳で逝去されたことを伝える New York Times の追悼記事を目にした。当学会が DSM の病名翻訳にかかわり、さらに ICD-11 のフィールド研究を進めているいま、精神科診断の信頼性を求めて論争を挑み続けた学者の訃報に接し、浮かぶままに思いと記憶とを綴ってみたいとなった。

記事はまず、精神疾患の診断が精神科医により、まちまちに下されていたところへ、診断基準を統一し体系化したのが Spitzer 氏であったと紹介している。興味深いのは、それまで精神疾患と見なされていた同性愛を、彼が DSM から削除したことに多くの紙面を割いていることである。そして、この決定が嚆矢となり、同性カップルの結婚を認める国や地域が、今日みるように世界中に広がったのだという。

改めて彼の業績を PubMed で調べてみた。精神症状の評価・診断に関する初めての論文は、1967 年、すなわち 35 歳の頃に始まり、以来途切れることなく続き、そして 2012 年の論文「DSM-5 信頼性の基準」に終わっている。ここに生涯、診断学にこだわり続けた彼の姿がみとれる。

DSM-III に先立つ初期の業績で目をひくのが、かの Rosenhan, D.L. の研究 (Science, 1973) への鋭利な批判論文である (1976)。研究は、Rosenhan ら 8 名が、幻聴を訴える患者に扮して全米各地の 12 の精神科病院を受診したところ、全員が入院させられ、そのうえ退院時には統合失調症 (寛解状態) というレッテルを貼られた、というものである。このことを根拠に、精神科医には正常と異常とを鑑別する能力はなく、したがって精神科診断は無価値であると結論している。Spitzer 氏は、Rosenhan による言いがかりに近い幾多もの主張に対して、一つ一つ反論し、単独で、しかも 12 ページにわたる沓へ渡る批判を展開した。ここには、彼の精神科診断への強い思いが溢れている。

この当時、米国の精神科医は、診断をめぐる別の批判にもさらされていた。それは US-UK Diagnostic Project (1966~1971) であり、結論の 1 つは、米国の精神科医は統合失調症を過剰診断している、というものである。この言い逃れのできない事実、DSM-III の制作へと、彼を駆り立てたに違いない。

彼はまた、DSM-IV や DSM-5 に対しても批判を緩めてはいない。たとえば、Parker, G. を筆頭著者とするうつ病の専門家達が、メランコリア独立を謳った提言を発表した (AJP, 2010)。執筆者 17 名の 1 人として、彼はここに名を連ねている。しかし DSM-5 は彼らの主張を退けた。それは DSM-III 以降、DSM の改訂が実証研究を舞台として議論されるようになったからである。つまり、メランコリアが確かに独立した疾患であるという十分な証拠がそろわない以上、その独立性を認めることはできない。皮肉なことに彼は、自らが作ったパラダイムの中で、自らの動きを縛られたのだ、ともいえよう。しかし、この 35 年強の間にメランコリアを対象とした研究が驚くほど少ないことは周知の事実である。なぜ DSM-III のときにメランコリアを独立させず、DSM-5 になって盛り込もうとしたのか、彼の本意を聞いてみたかった。

私事ではあるが、来日した彼の講演をじかに聴いたことがある。卒業してて大学の医局にいた頃なので、DSM-III 公開 (1980) の翌年のことだったと思う。会場が臨床講堂であったことだけは確かである。その日は、小此木啓吾先生が階段教室の前方の椅子に座り、講演を真剣に聴いておられた。質疑応答の時間になると、真っ先に手を挙げ、DSM-III への強い批判を口にされた。質疑応答の内容は覚えていないが、いつもは柔和な先生が顔色を変えて Spitzer 氏を問い詰めていた。その姿が不可解だったので、今でも鮮明に覚えている。DSM-III を戦旗とした生物学的精神医学の台頭が、米国での精神分析を弱体化しつつあった、という背景を知ったのは、恥ずかしながらかなり後年のことである。

Spitzer 氏が論駁した、精神医学は必要ない、という妄断は、さまざまに姿形を変えながら、今に至っても払拭されてはいない。がん臨床ですら、診断は間違いであり治療は不要だ、という意見がまかり通るのが医学の危うさである。精神医学不要論あるいは脱価値化しようとする動きに対峙して、その意義を主張し、患者や家族、世論や行政の理解を得るためには、精神医学の存在価値を、より確かなエビデンス (この言葉を嫌う同僚がいることは承知しているが) を積み重ねて証明していくしかないと思っている。